

「美はまた近くなりになり」

柴田 勝家

1.

更新、更新、また更新。

ドレッサーの鏡を何度なぞっても、そこに表示された自分のアカウントに変化はなし。わざわざ本名の「橘アサヒ」で登録しているのに、リアルの友人は誰も反応してくれない。もちろんフォロワーからの賞賛の声も、これ見よがしな嫉妬の声もない。評価数だけは百個を越えてるが、これは新着投稿にフォロワー同士で送るご祝儀のようなものだ。

だからランキングも変わらない。『Viewies』の美容コスメ部門では十位ギリギリ。これでも立派だと言ってくれる人もいるが、数ある美容系SNSの中の、さらに複数あるカテゴリの中の十位だ。総合カテゴリなら百位以下だし、ファッションや顔の綺麗さでは勝負もできない。

つい気になってランキングを見てみると、総合カテゴリのトップにいる「ノゾミ」という名のアカウントがレコメンドされた。写真は首から下しか写していないというのに、ファッション部門と健康部門でランキング上位にいる。まるで住む世界が違う。きつとどこかの金持ちで、高級エステに通い、好きなだけ服を買い、デパコスをふんだんに使っているんだ。札束で殴られたら勝ち目がない。

開いていたウェブページを閉じ、改めて鏡を見る。化粧ノリも悪くないし、美容院で髪も整えてきた。筋肉だつて全身のフォームが崩れない程度には鍛えておいた。なら何がダメだったんだろう。眉間にシワを寄せつつ自分の顔をチェック。目の下にくまがあるけど、これは写真の加工で消してるから大丈夫。

でも、と思う。

もしかしたら、写真の加工越しても生活の乱れが伝わっているのかもしれない。だとしたら、もっと良い暮らしをしないといけない。でも無理だ。仕方ない。忙しいんだから。

振り返れば洋服とダンボール、飲みかけのペットボトルが散らばる部屋がある。写真を撮る時だけ、そんなゴミを足でどかしてスペースを作った。写真の中の私は、綺麗な世界で生きる優雅なアラサー男性だ。

「モデルさんとかやられてたんですか。アサヒさんみたいな人になりたいな」

ブックマークした感想コメントは何度も読み返している。だから覚えてしまった。

2.

家の近くにあるマッサージ店。全身もみほぐしで一時間三千円。最新設備も何もない、整骨院に毛が生えたような場所。これが私にとって安息の場所だ。

だというのに。

「むう、また負けてる」

ベッドにうつ伏せになったまま、スクロールをいじって『Viewies』のランキングをチェックする。今週も私の投稿は鳴かず飛ばずで、逆に例の「ノゾミ」はまたしても総合カテゴリーで一位。何気なく投稿を見てみれば、来週にはハワイに飛んでのワーケーションだという。つくづく住む世界が違うようだ。

「アサヒさん、眉間にシワ寄ってるよ」

施術を担当してくれる女の子がそんなことを言う。いけない、と思って眉を上げて表情筋をほぐしておく。こうした顔のコリは自分でなんとかできるが、体の疲れは他人に任せるしかない。

「その人、ノゾミさんですよね」

む、と思わず反応してしまう。彼女に『Viewies』を教えたのは私だけど、それでも「ノゾミ」をしっかりとチェックしていることに少し嫉妬する。

「ノゾミさんって、フローラモデルをしてるらしいです、よー！」

そこで聞き慣れない単語が飛び出してきたから、背中を伸ばされつつ尋ねてみる。

「腸内フローラを世界に公開してるんですよ。フローラオートドライブだったかな、腸内環境を最適な形に保ってくれて……、食生活や健康にも役立つ情報だとか。ノゾミさんの腸内フローラを真似たい、って人が大勢いるんですよね」

「それって、結局どうするの？」

「なんだったかな、健康な人の腸内環境を測定して、あとは△とかで環境が似てる人に食事とか、サプリをオススメするとか。牛乳飲むとお腹壊すような人が、これを利用すると牛乳飲めるようになった、みたいな」

なるほど、と思った。ようはスーパーモデルが使っている化粧品やサプリを一般人に勧めるようなものだ。憧れの人と同じ体になりたい、と思うことは万国共通だろう。

しかし、それが腸内フローラだというなら。

「でも、それって結局、排泄物の話でしょ？」

「まあ、排泄物の話になりますねえ」

話を聞きながら、スクロールで検索して関係する話題を調べていた。そもそも腸というの

は第二の脳とも言わべき重要な器官で、その環境が健康状態に直結するものらしい。それがフローラオートドライブという微小な機械を腸内に入れることで、自動的に悪玉菌と善玉菌のバランスを取ってくれて、心身ともに健康でいられる、とかなんとか。

さらにフローラモデルというのは、それこそスポーツ選手が脈拍や心拍数を見るように、自身の排泄物を定期的に測定して腸内環境をベストな状態に保っている人たちだそう。この人たちの腸内環境を参考にして、最新型のフローラオートドライブがどんどん更新されているとのこと。

フローラオートドライブを扱う企業に認められるほどに健康でいる。それは結構な努力だろうが、私の美意識にはないものだ。いくら内臓を綺麗にしたところで、他人がそれを評価してくれるだろうか。いや、でも。

「評価されてるんだよね、それが」

「何がです？」

私の独り言を聞き流してもらったところで、不意に隣のベッドとこちらを隔てるカーテンが引かれた。視線を送ると、一人の老年女性がベッドに寝そべった状態で私の方を見ていた。

「あ、ごめんなさい、うるさかったですか」

思わず私が謝ると、対する女性は歯を見せてニカと笑った。

「いや、全然。ただ、ちよつと腸内フローラの話してたからさ。私もやってるんだよ。だから気になってね」

朗らかに笑う女性は、それこそ白髪にシワの寄った顔が目立つが、背筋は通っているように見えた。あれで六十代の前半といったところだろうか。

「最近、引越してここに通い始めたんだ。アナタ、常連さん？」

「あ、はい、橘です」

「私は柳川。まだまだ元気な九十四才だ」

きゅっ、と思わず聞き返してしまいそうになった。とてもそうは見えない。

「フローラオートドライブってのはいいね、健康なウンコを出すのが大事なのさ」

柳川さんは大笑いして、それからずっとウンコという言葉を連呼していた。

3.

その翌週も、私はマッサージ店で柳川さんに会った。

「橘さん、先週ぶりだね。これお土産」

待合室で出会った柳川さんからマカデミアナッツのチョコを渡された。ただ私は、その中身よりも真っ直ぐ背を伸ばして立つ彼女の姿に見とれてしまっていた。パンツスタイルに赤いジャケット、足はスラリと伸びている。

「改めて見ると、柳川さんってお綺麗ですね」

「そうかな？ まあ、昔は舞台女優をやったのさ」

その日の会話はそれくらいで、お互い別々の時間にマッサージを受けて帰った。帰り道で私は二つのことを考える。一つ目は柳川さんみたいに綺麗に歳を取ることの凄さ。とてもじゃないけど真似できない。二つ目は『Viewies』で今週も「ノゾミ」にランキングで惨敗だったこと。

この二つをつなぐのは、やっぱり自分が綺麗になりたいという思いだ。

男なら筋肉で勝負をすればいい、という意見もある。もちろん部屋でできるくらいのトレーニングはしているけど、それだけでは意味がない。私は筋肉よりも肌や髪、自然なボディメイクの方に美しさを見出し、それに見合った化粧や美容食を用意してきた。色んなものを試してきた。それが一つ二つ増えたって、どうということはない。

だから私は、ついにフロラオートドライブのセットを購入してしまった。柳川さんもやっていて、さらに「ノゾミ」もやっているとなれば、腸内フロラを整えることが美につながるのだと安易に考えてしまった。

ついこの間、自分で馬鹿にしたばかりだ。スーパーモデルと同じサプリを飲めば自分も同じ存在になれる、なんて。でも、これだって仕方ない。出来ることは何だって試すしかない。そうしないと「ノゾミ」には勝てないんだから。

私は自宅に届いたフロラオートドライブのキットを開封する。中身はリストバンドと検便用の棒。それから微小な機械と腸内細菌と一緒に固めたサプリメント。こんなもので自分が本当に綺麗になれるのか。

私は期待と疑念を込めて、空になったダンボールを部屋に投げ捨てた。

4.

「なんだか、調子が悪そうだね」

マッサージ店で柳川さんが声をかけてきた。もう知り合いだからと、ベッド同士を仕切るカーテンは開かれている。

「最近、サプリを飲んでるんです。細菌サプリ」

「ダジャレ、じゃないか。フロラオートドライブ用のかい？」

「はい。後は、食事もヨーグルトとか、玄米とか、腸に良さそうなものばかりにしたんですけど。でも、ダメなんです。どれだけ計測しても腸内環境はよくならないし、肌荒れは凄いいし、もう『Viewies』の投稿も全然出来てないし……」

マッサージを受けながら、つい吐き出してしまった。柳川さんは心配そうにこちらを見ているが。こうなると止まらない。

「柳川さんは知らないかもしれませんが、『Viewies』っていう美容系SNSがあって、そこでノゾミっていう女性が人気なんです。その人もフロラオートドライブを使って、私、どうしてもその人に勝ちたくて……」

ここ最近、ずっと「ノゾミ」のことが脳裏にあった。もしかしたら柳川さんに出会ったのも関係しているのかもしれない。綺麗になろうとするほど、周囲の環境は遊んできて、汚れていく自分に焦ってしまい、またストレスが貯まる。完全な悪循環だ。わかってはいる。

だから、柳川さんが私の悩みを快活に笑い飛ばしてくれたのは嬉しかった。

「そうだね、大事なものはバランスだよ。腸内環境はもちろん悪いといけないけど、良すぎてもいけないんだ。その人に合ったバランスがある。ちゃんと食事は取ってる？ ヨーグルトだけで済ませてないよね。そんな状態でサプリの飲みすぎも良くない」

「でも、このままだと、私」

「そうだな、そんなに気になるなら、フロラドネーションを受けたらどうだい？」

今度も聞き覚えのない単語が出てきた。だから視線を上に向けていると、

「便移植だよ。相性の良い他人のウンコを体に入れるんだ」

と、柳川さんが身も蓋もない説明をしてくれた。

「そんな、汚くないですか？」

「汚いもんか。腸内環境が整った健康な人間の便だ。まあ、口からは勘弁だけどね」

柳川さんは可笑しそうに笑うが、つまり、それは口ではない箇所から排泄物を体に入れるというわけだ。この場合、該当の箇所は一つしかない。

「その顔を見ると、橘さんはまだ汚いと思ってるね」

「いや、まあ……」

「汚いっていうのは人間の感じ方さ。そういうのは大体、離れると汚く感じる」

「離れると汚い、ですか？」

私の問いかけに、柳川さんは少しだけ寂しそうな表情を作った。

「唾も、ゲロも小便可も、体の中にある時はなんとも思わない。でも、それが体から離れると汚いと思うんだ。なんでもそうさ。自分の部屋は汚いとは思わなくても、他人の部屋の汚れ

は気になる。親しい人間の欠点は美徳に感じられるし、嫌いなヤツが人気だと裏があると思う」

いくらか思い当たることもあり、私は柳川さんの言葉を静かに聞いていた。

「人が一番離れていると思うのは、きつと老いだろうね。なんといっても、生まれた瞬間からずっと離れていくんだ。どんどん古くなっていく」

その言葉は、柳川さんが自分自身に向けているようだった。これほど若々しくあっても、やはり意識せざるを得ないのだろう。

「でも、柳川さんは――」

だから、何か気の利いたことでも言おうと思った。

そんな瞬間に、突如として激しい腹痛に襲われた。脂汗が滲んでくる。近頃、ずっと突っ張っていたお腹が、ここで破裂してしまうのではないか。そんな恐怖がある。

「綺麗なままで」

なんとか一言を絞り出したところで、私の腹痛は耐え難いものとなった。

5.

結局、私は病院に運ばれ、いとも簡単に「便秘」という症状が告げられた。

腹痛は時間と共に治まったし、一応は薬ももらったから問題はない。ただし、根本的な解決には至らないということで、内科の先生は私に「フローラドネーション」を提案してきた。ここまで来ると運命じみてくる。

内科医の先生から詳しく聞けば、フローラドネーションというのはフローラオートドライブの進化版、というか、より個人向けにカスタマイズされたものらしい。その人にとって相性の良い、理想的な腸内フローラを提供してもらうことで、腸内細菌のバランスを自動的に整えることができる。さらに機能自体はフローラモデルの人たちが使っているものと同じで、自身の腸内フローラを可視化して情報を送る。それによって、日々の状態に見合った食事をオススメしてくれたりもするらしい。

その答えを保留にしつつ、私は翌週もマッサージ店に行った。助けを呼んでくれたオーナ―とマッサージ師の女の子、そして柳川さんに御礼を伝えようと思ったからだ。

「やあ、橘さん」

しかし、当の柳川さんはニコニコと笑いながら「これ、お土産。パリの」と告げ、洒落たクッキーの缶詰を渡してきた。この人には敵わない、と思って、私は素直にフローラドネーションについて再び尋ねることにした。

「それじゃあ、橘さんは前向きに検討中、ってことかい」

「そうですね。今まで、ずっと外見ばかり気にしてたので、そろそろ内面も大事にしなきゃな、って」

「なにより。健康っていうのは体だけじゃなく、精神も含めてさ。内面ってのは臓物だけじゃなくて、心のことだよ。腸の環境が良けりゃ、不安になったりもしない。逆も然りで、イライラしてたら腹が痛くなる。そんなもんさ」

柳川さんの言葉が、今なら素直に受け取れる気がした。

ほんの一ヶ月ほどだが、あの『Viewies』に投稿しないようになって考え方が変わった。美容は大事なものが、知らないうちに中毒のようになっていた。柳川さんも腸内環境はバランスが大事だと言っていたが、のめり込み過ぎていたようだ。これからは自分なりのペースで投稿していくだろう。

「ところで」

そうした中で、ずっと気になっていたことを柳川さんに尋ねることにした。

「柳川さんって、フロラオートドライブについて詳しいのに『Viewies』の話とか、しませんでしたよね。あれで人気のノゾミもやってるのに」

「そりゃそうさ」

この日も、隣のベッドに並んで何気ない会話をする。そのつもりだった。

「自分のことを声高に言うのなんて、恥ずかしいじゃないか」

「ええ？」

思わず変な声を出してしまった。柳川さんは意地悪そうに笑って、私の方に携帯端末を向ける。その画面には「ノゾミ」のアカウントが表示されている。

「え、あれ、でも、その写真、すごい四十代くらいで」

「加工だよ。まあ、それも含めて美だってさ」

その流れで柳川さんはカバンから保険証を取り出して見せてくれる。名前は柳川望。一九五六年生まれの九十四才。

「さて、じゃあフロラドネーションの話だけど、どうだい、私のフロラを移植するってのは？」

「でも、いいんですか？」

「気にしないで、私たちは友達だからね」

そう言われると、なんだか不思議と受け入れられそうだった。どうやら私と柳川さんの距離は近くなっていたようで、汚いと感じることもないらしい。

「じゃ、二人で写真でも撮って投稿しようか」

久々に『Viewies』を更新すると、今までで一番多くの反響があった。でも、別に内容は気にしない。大事なのは写ってる私たちだ。それも外見でなく、その内側。

ドレッサーの鏡には、笑顔でピースサインを作る私とノゾミの画像が映っている。

